

第 37 回 安田女子大学・安田女子短期大学 エッセイコンクール

自由部門

優良賞「挨拶の大切さ」

家政学部 生活デザイン学科 2 年 3 組 影山向葵

私は中学校 3 年間、ソフトボール部に所属していた。毎日忙しく練習も大変だった。部活が終わるのは大体 19 時で家に帰るのが 19 時すぎだった。

私は、割と学校と家が近かったので、直ぐに帰ることができた。私の住んでいる地域は田舎で高齢者が多く、いつも挨拶をしてくれる。部活から帰る時に、必ず「お疲れ様、おかえりなさい」と挨拶をしてくれるおじいちゃんがいた。私は、それが当たり前ようになっていった。ある日、私は部活でスランプに陥り、ミスばかりしてしまい、気分はとても落ち込んでいた。本当に辛くて誰にも相談できなくて、泣いていた。その帰り道、いつものようにおじいちゃんが、「お疲れ様、おかえりなさい」と言ってくれた。だけど、私は自分が犯した部活のミスのことで頭がいっぱいでその言葉を見逃して走って帰ってしまった。そして、次の日無視したことを謝ろうと思い、いつものように挨拶をしてくれるだろうと帰り道を歩いていた。

しかし、そのおじいちゃんが見当たらないのだ。私はずっと毎日欠かさず挨拶をしてくれていたのに急にないんだろうと不思議に思った。家に着き、祖母から「あのおじいちゃんは亡くなられたのよ」と言われた。私はそのとき頭が真っ白になった。そして、後悔とともに罪悪感に苛まれた。本当に毎日部活帰り「お疲れ様、おかえりなさい」と言ってくれていたあのおじいちゃんが急に亡くなられた。私は正直部活帰り疲れていたけど、そのおじいちゃんの言葉を聞いたら何故か元気をもらえるような気がして楽しくしていた。私が一番後悔したのは、自分が部活でミスをしておじいちゃんの挨拶を見逃してしまったのが最後となったことだ。私は、亡くなったというのを聞き、当たり前というのではないんだなと感じた。私は部活でミスして落ち込んでしまい、その感情のまま帰ってしまったため、おじいちゃんに少し当たったようになった。その夜、反省して次の日謝ろうと思っていたのにおじいちゃんが居なくなっていたのはとても寂しく虚しく悲しかった。祖母から話を聞くと、元々は体が弱くて杖をつかないと歩けないくらいの状態だったらしい。最近では畑仕事を朝から夜までするくらい元気になっていたそうだ。私がいつも帰る時は家の前の少し空いたスペースで座っている印象だった。確かに、いつもそこで座ってなにをしているんだろう、とは思っていた。少しおじいちゃんの気持ちを考えてみた。歩けなくても外の風景や匂いを感じることも大切だと思ったのだろうか。そのおじいちゃんは人が通ったら必ず挨拶をしているのかなと思った。挨拶を見逃されたらきっと辛いのに、私はその時の自分の感情に左右され無視してしまった。本当に自分が情けないし、挨拶は大切なコミュニケーションのひとつだとそこで学んだ。おじいちゃんと 1 回で

もちゃんと会話をしてみたかったし、謝りたかったと思った。次の日から「お疲れ様、おかえりなさい」の挨拶がなくなった。いつものように言ってくれるあの言葉がないだけで、とても寂しく感じた。私は立ち止まって自分と向き合った。自分を見つめ直す時間になった。その日から私は挨拶を心がけるようになった。私の学校は元々挨拶に厳しかったが、たくさん先生や友達、先輩、後輩に積極的に挨拶をするようになった。すると、担任に「最近元気いいね。大きい挨拶でこっちまで元気もらえるわ」と言ってもらえるようになった。本当に挨拶はコミュニケーションだと思ったし、表情や声のトーンも大事だなと感じた。おじいちゃんのおかげで、挨拶だけでなくなにか大切なことを学べた気がして嬉しくなった。

あの時、挨拶を返せなかったけど、おじいちゃんのおかげで挨拶の大切さを学べたことは忘れていない。今ここで感謝を示したい。そして、人は当たり前だと思ったりいけないと思えるようになった。毎日、起きてご飯を食べて学校に行けているのも当たり前ではなく、とてもすごいことなんだなと感じるようになった。挨拶はいつどんな時でも、大切に人と関わる時の重要なカギになってくるのではないかと思った。これから社会人にもなり、人生で辛いこともたくさんあるだろう。しかし、そんな時はおじいちゃんとの挨拶の出来事を思い出して、頑張ろうと思う。おじいちゃんは今、空の上で元気にしているのか、きっと見守ってくれている気がしている。最後にあらためておじいちゃんにありがとうと伝えたい。